

令和7年度 全国学力・学習状況調査の結果分析について

結果分析の詳細（小学校）

（Ⅰ）各教科に関する調査（○、▲は県の平均正答率と比較し顕著な項目）

① <国語の結果分析>

○学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかをみる問題

【言葉の特徴や使い方に関する事項】

○時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くことができるかをみる問題

【我が国の言語文化に関する事項】

○時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることができるかをみる問題

【読むこと】

▲自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができるかをみる問題

【話すこと・聞くこと】

▲目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかをみる問題

【読むこと】

〔改善に向けた取組み〕について

インタビューで質問する目的や意図に応じて、内容ごとにまとめたり、それらを相互に結び付けて関係を明確にしたりする点に課題がみられました。指導改善として、質問するときの場面や状況を具体的にイメージできるような指導の工夫に取り組んでいきます。また、「熱い」と「暑い」など、同音異義語に関する理解に課題がみられました。指導改善として、漢字を繰り返し書く練習を重視するのではなく、意味との関連を図りながら漢字を文章の中で活用していく指導に取り組んでいきます。説明的な文章においては、事実となる複数の資料を結び付けながら自分の意見を考え、表現する活動を行っていきます。

② <算数の結果分析>

○小数の加法について、数の相対的な大きさを用いて、共通する単位を捉えることができるかをみる問題

【数と計算】

○伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができるかをみる問題

【変化と関係】

▲台形の意味や性質について理解しているかをみる問題

【図形】

▲分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述できるかをみる問題

【数と計算】

〔改善に向けた取組み〕について

情報過多の問題から必要な情報を取り出して解決に生かす点に課題がみられました。指導改善として、一定の方法で問題を提示するのではなく、時には条件不足や情報過多にするなど、児童が数量関係に着目できるような工夫を取り入れていきます。図形領域については、積極的に図形を回転させたり反転させたりして、見方を豊かにするとともに、定義を基にした図形理解を深めていきます。異分母分数の計算については、通分して計算する手続き的な操作はできるものの、その過程を単位分数の幾つ分かに着目して説明する点に課題がみられました。数を構成する単位に着目した見方・考え方を働かせる指導を大切にしていきます。

③ <理科の結果分析>

○赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現することができかをみる問題

【地球を柱とする領域】

○水の温まり方について、問題に対するまとめを導きだす際、解決するための観察、実験の方法が適切であったかを検討し、表現することができかをみる問題

【粒子を柱とする領域】

▲身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いているかをみる問題

【エネルギーを柱とする領域】

▲氷がとけてできた水が海に流れていくことの根拠について、理科で学習したことと関連付けて、知識を概念的に理解しているかをみる問題

【地球を柱とする領域】

〔改善に向けた取組み〕について

金属の性質における理解が不十分である様子が伺えました。指導改善として、さまざまな金属について、電気伝導性や磁性を関連付けながら実感を伴った理解を得られるような活動に取り組んでいきます。2個の電池を直列につないだ図を選択する問題において、ショート回路を誤って選択する児童の割合が高い傾向にありました。指導改善として、実際に電池を組み立てる活動に取り組んだり、装置を言葉や図で表現したりすることをとおして、適切に図を読み取る力を育むよう努めていきます。引き続き、理科の授業が児童にとって学びと生活の橋渡しのような存在になるよう実践を積み重ねていきます。

(2) 児童の質問調査(○、▲は肯定的回答の割合の顕著な項目)

○人が困っているときは、進んで助けている

○困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できている

○算数の授業で、どのように考えたのか説明する活動をよく行っている

▲学校の授業時間以外における、普段(月曜日～金曜日)の1日当たりの勉強時間(学習塾なども含む)

▲ICTを活用し、分からないことがあった時にすぐに調べることができる

▲ICTを活用し、自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができる

「人が困っているときに進んで助けている」と回答する割合が県や全国と比較して高い傾向にあることから、他者を思いやる心や親切心が育まれているとともに、道徳的価値につながる行動がとれている児童が多いことが伺えます。「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」と回答する割合が県や全国と比較して高い傾向にあることから、スクリーニングシートの活用や複数の教員の目による児童理解、SC や SSW などの関係機関との連携など、「かながわ子どもサポートブック」の取組みが推進され、定着してきている成果が伺えます。算数の授業においては、答えの正誤ではなく、答えに至るまでの過程を重視した学習活動が積極的に行われていることが伺えます。

一方で、家庭での学習習慣の確立については、全く勉強しない、または、勉強時間が少ない児童の割合が県や全国と比較して高い傾向にあることから、学校と家庭・保護者が連携して家庭学習のあり方や取組みを再検討していく必要があると認識しています。ICT を活用するスキルについては、児童の自己評価が県や全国と比較して低い傾向にありました。このような実態を受け、本町では各学年で身に付けるべきスキルを体系的に整理し、学年に応じた系統的な指導の充実を図っていきます。また、児童自らがICTを活用したくなるような学習場面を設定し、自分の考えや意見をよりよく伝えようとする力の育成に努めていきます。